



近世說美少年錄

九編
五

近世說美少年錄

~ 13
3567
45



門 13
號 3567
卷 45

新編 石童子訓卷之二十

東都 曲亭主人 口授編次



魚丸妖魔と對治し絶つ家と興を
晴賢命と免まき夜之池邸小走る

却説和甲十郎正忠大江社四郎成勝の防守筑四郎季彦杵臼入道趙心と共
侶の奈良良櫻又重作次世目越松時八鶴脛奈我四郎鴨脚短平以下の残
兵四五百名と相俣して河魁寺小なる處へ魚丸母子兩廂和尚共に出迎
相勞ひて多く客殿小園坐多る士卒へ都て相別れて一隊毎小憩所居り或る
金漢兒と勦て疲る馬と洗るもあべつた飯の儲置かぬ餓る腹と
繕之軀で睡不就も多る開の中正忠成勝八重作時八奈我四郎短平共侶小
客殿小居り魚丸の實母周晋比佐尼と送小云の口誼あり却今日鬪戦あり

早稲田 大學 図書館
昭 34.6.3 雙
藏 書

敵の陣中へ怪しむ少女立去りて猛風と起る。其の顛末
 あり折れり。防守杵臼の援兵ふよと萬死と盡て一生と
 せり。苦きとちやく魚丸母子兩相和尚のへん外に洩す
 通能正義杖二郎押繪
 有斯一程小日暮夜に初更近けれも通能正義杖二郎押繪
 然らば風吹付きて身と傷ま。思ふに安否と知る由
 短平等ら部へ素人然とも。喘る成勝推禁めて已む
 懐かある仙丹ある非如深瘡を負ぬとも。自療の即
 人れも押繪少女共の蓋世の武勇あり敵の虜ふるべ
 信のべらんと詞のまに。詠らるるに。小の者あり時
 る奈我四郎短平も共召身と起して。早く思ふ程ふ
 張栄六郎通能

和甲十郎正義杖二郎茂洋其女弟押繪。既ふしてか
 坐入り。正忠成勝八重作。其の恙を相賀して。今日
 能者の人々の無異に歸陣を喜び祝して。却今日の難
 藝正義杖の投石茂洋押繪の胆畧武勇。勢の敵と殺
 浅瘡深瘡を負せ。溝川橋の退口より敵の困と追
 通能正義杖洋押繪の憶も路も迷ふ。能與村の荒社
 あり。且其の頭を池水に。衣を洗ふ。賤婦の路次と
 宗の養母大刀自の少り。時。坡如の。故不能與院
 祭る。枉津天女と喚做す。其後深信懈念の。這回
 軍の怖れ。黒闇の枉津天女。祀りと断食を。深信
 神舊縁。惹れて健宗と祐助。故の彼荒社。枉津の
 木像。去。鐘野

子舎小退だて會出東ぬ其香盒と見れば果と硝子也高純の一寸許上下圓く
 を握る不堪成勝是を受戴して小十郎主首足らるるをさうりて渡與まて正義の
 受取の握り見て思ひし程と重なり是れ仙丹を龍の擲の好んといひ返
 其樞二郎八重作押繪もゆるた珍香の即坐おしと感嘆を當下防守李彦の正
 忠成勝も向ひていさう仙丹の經驗疑ふはたは是れ如何なる禪師の靈符と
 のぞ其玉金と保まら如く利益の莫大なりを對陣の始より靈符を掲げ
 枉津天女傳りて頭出するもあら機小臨表を心と耳く計ひぬるを正忠黙頭で
 勇士大敵と戦ふ仙丹秘付の眞助との瀕の本意あらぬを經驗面をさうあけ
 といふも如くせざるを心と心と成勝と共魚丸を稟せし軍議聴せぬか如く明
 日小橋の闘戦おはれ君も出陣あらして時運を試ぬかといはれて魚丸悦小堪
 甚多く答るる我身の乳臭は少年より大義を謀る小足らるる幸いなく諸君子の

愛顧せられて明日の闘戦の王将の傲と出陣せし最度野の多し順とて逆を
 討つ二戦三戦に至るまで名を遺途に知らず上へ死なるとも怨み又只教は依人のと
 然も雄々あ大人は答不趙心笑はれ介介明日の已も腋子も徒ひなら短夜
 られ出陣の準備といはれぬと稟せと成勝見えて既軍議の果は明日の准
 備まで時を要するといふ正忠も亦の多し明日辰の初刻より未の尾まで辰辰とま
 日の出時候の出陣すべし衆皆あまをさるるをたはし樞二郎と心と時辰を呼で
 疾退りて疾退りて躬方の士卒小陣拘せし其餘の要事は如此とて奈我四短も
 疾退れといはれて三箇の小頭人あらる果てを退りける話説介両頭然程小鎗野伍
 六郎健宗は枉津天女の眞助ありて闘戦十分の勝とて最速く思ふのら名た
 たる敵の頭人を一箇も鼓も捕らるる反て躬方の頭人等八深瘡流焼を負ぬるは
 是猶飽心地を躬方の士卒と集合で降人毎と牽せし鎗野の鎗かへる

程小任津天女幾間小牧書院小立て俟て居り健宗かごとく或衣脱捨衣改
 め養母大刀自と共信小慌忙に書院小立て三拜あり京まき天女の神恩須弥より
 高く然しもの剛然敵と一時小敷走せり最愉快の造化されども遺憾の敵の
 頭人大江社四郎峯張染六名あり名あり賊徒を殺しぬむ及て躬方小金彦磨目三
 かりの美迷惑仕ぬ天女無量の神通力も只極風と起すのとき敵と殺す疎多飲
 りて明日の闘戦より尚神力と施しぬ賊徒を迷さく敷果能與村多荒
 祠を昇更て祭奉人急々如律令と啓され任津天女も笑て健宗開りりり
 りるら約莫今易闘戦の名あり敵と敷捕はる躬方の頭人浅瘰と負し共神
 力の為るあむむ信る者の落れ故に汝速くめ諸頭人汝々の士卒も一致し
 我を念ふ必也明日の闘戦より我亦妙の段と施し敵の奴們漏まき者多し
 倘又深信疎るる負りりり我を怨之彼阿甦寺の奴們の志を像く彼身を

守る神さるあむむ実小容易の敵あり明日の夙め出陣して又大掛を敵と俟べ
 折我復出頭せ腰輿を志と一言詳小宣示共健宗唯々と秘首く神説
 へととと任津せむを開て我今宵加持来。瘳あり明を俟て悉皆平愈せん
 然るの苦勞ふまことかといれ健宗喜悦小堪む大刀自の始より水明の敷珠楯
 鳴く專唱名祈念して在り這時練頭を拾はるる宣示尊神説宣の
 如く明日の怨敵伏誅せし母子の幸のさるる當郡士庶の天幸る然る時我大刀
 自小百の二百の千の千も壽命を授けぬらんと念ざれ健宗亦頭首く我
 ら所願母同利益と仰まき共戴足禮拜と奉る頭を拾はるる有
 つる任津天女の形貌の見えざるのけの當下健宗の例のとき怪はる大刀自先立
 俱の後堂退き北嶋番太守実と召まき天女の示現云云宣示くと又か明日



人ヲ勝天
天定勝人
此段十頁より
下に見えり



且聞ふ陣せよと苛三隈八もゆへて蚤く陣徇せよ勿論士卒に至るも深信並懈
 るる者必斬入るも隈下知事と詞急迫く吩咐れ牝嶋番太の言
 美く外面投て退りけ有右の詰朝健宗戎衣と近習を左右に従へ女闘立出
 登見小尻より掛れ程る集諸隊の頭人鍼持隈八鬼刺苛三首を蛇塚真武
 四郎和六牡丹五竹木虎狼平鬼黒九郎館内也刀齋の他侍品三千名雜兵合せ五
 六百名馬口剛を嫌と鎗柄の長を厭を處陔も集合然れ身小疾も
 者一夜の間皆愈て奔走障りと又も開中竹木虎狼二昨日和里夜の投石左の
 眼を傷れ鬼刺苛三股を深瘡を乾ね馬を乗ぐと稟ま故健宗則件の二
 人を留め牝嶋番太と代を隊配都て昨日の如く又彼腰輿を先小早と六掛投下打
 せける軍装の目覚えを見て時彦是と評き健宗漫ふ妖神を信仰と云ふ大楯出
 陣も凶兆ありとや約見の狐狸を征する者彼任津女の狐狸の魅するあり

此の妖怪の約見と憚和漢の先蹤疑ふ況邪りま克も勝負未然不知不
 るの同話体題這時尙懸寺を義古の軍兵五百餘名と隊分て韓錦楳二
 茂洋和甲十郎正義先隊の頭人の奈良櫻八重作次世と副を鶴野奈我四郎鴨
 脚短平は是小従の隊の則大江杜四郎成勝峯張六郎道能頭人の勇婦神鈴と
 副と見越松時八重是小従の隊の部領の轍魚丸主将と左の防守は四郎季
 彦も右の伴日程栄入道趙心も和甲十郎正忠と後見は魚丸這月打扮の春葱
 絨の身甲の精好の奴袴と張せ白羅小五本の練糸と菊の花を縫做した戦袍を
 被り金作の大刀の彪の皮の尻鞆掛と鶴丸の佩たり背に駝做さ三羽の征前も
 握持の重藤の弓連銭青毛の三歳駒の雲珠鞆置て優ふも跨り此紫野深峰の
 敏赤總鈴を響音鼓をたたる足撥の御音勇一かをたの者るは年二八の美心
 年顔の三月の桃花の如く夜安の秋山の丹楓不似る正は是幽谷の鳥見春と待り

枝の遷り雪中の寒梅東風吹れて開き欲きも斯やと思可き菊地部領の家花
 號十六番の秋菊も色妙ふ深做したる流の旌旗夏の朝風吹せり器杖執るの
 百の従兵威勢宛虎彪の像く隊伍齊々教方より入る程に鎧の先鋒の頭人牡丹
 五黒九郎也刀齋の二百有餘の隊兵を従へ又彼腰輿と木早多這日の又大
 概る長暇の邊を端々敵と撞見けり當下健宗の頭人等共馬を騎出りて
 四下响く聲高きふふふと龍の盗見毎昨日微りも又推せり虎の鬚と更ら
 とも今日鏡を覚期せり勇ら鎧を拵りて嗚いて萬れ義兵の頭人樞二郎八重作
 らいりて一併徒の廣言天運既の循環く王将の陣と知らるや天四訓思
 知得んぞ三言の果なき三騎相並んで衝き鎧の双尖と受流し相戦ふ樞二郎五黒九郎也
 刀齋やつたの猛者聲早も早苦けくやその隊の在り蛇塚真武四郎鐵持隈八
 等はを見て先陣尚敗る代りて敵と挫んども其隊兵を找る程に健宗も亦占

るごと天女の出願遅く今日も亦折と違ひて冥助と申ありて馬上合意
 きて憶の玉馬を找る左方従兵の毎後陣の頭人北嶋番太右司等も其後
 にもとて王の後方の續けり既わく黒九郎也刀齋牡丹五義士の頭人樞二郎八重作
 本我四短平也戦ふ程に腕衰へ鎧の乱れ各後陣を負取らされ流る鮮血
 身を際て免れがく見え折る健宗の陣頭の柱居らり腰輿の裏より一箇の
 天女閃光輿の上立願れても小技持る剣と杭て揮晃る程もあはれ留小す
 郎正義も躬方の頭人樞二郎等の敵と戦ふ外小見ら此騎を棄退せり在
 津やぬると張る那時遅く這時速く伴の光景と見て馬の拍打れ馳ぬ
 めて右の合意す硝子の小壺を擲り修煉の精妙窟違を拜津女の眉回の撲地と
 打中れ礫の硝子散り砕けて内中の龍なる仙丹の那身小塗破ると見え在津の
 一聲叫び果て身と仰反く伴も時持る剣も離れ背も小怪死で後方

馬を立たり健宗の胸頭も馬と闘ふと鋭味怪む健宗の頭も金く地上に
 存る軀も馬より落れり後人知る今這時杵臼入道趙心靈符を早く合はせ
 の梢の枝より敵の方を推向け如未禪師の法華を唱て真助を祈ける靈符仙丹両
 るも都音の物の應る如狂津の幻術ゆれば彼が持たし劍を健宗首を敷られけ
 意外の奇特の義兵の一軍頭人士卒推並て感嘆の聲を令ける是れ驚く逆
 徒の頭人真武四社丹五黒九郎也刀齋端高奈我四郎短平小前後
 まも機二郎八重作も逃し遣らば大喝一聲突き鎧の又火の黒九郎社丹五
 或の胸前或の咽喉を刺れて馬より落れり又也刀齋端高奈我四郎短平小前後
 も刺抜れて既の深癩の堪され是れ敢る敷られけ并中限八と真武四郎も金
 も路を横ぎて逃る透る追追鬼來ぬ義兵の頭人勇男女是則別入るも奈
 張通能と押繪入蓬返せと叫ぶも間近追逼る限八真武四郎見え敵

男女二人の過た猛しとるも續く兵を結果に徐めんと咳け共侶の馬を其方
 へ兼返せ程もあらず通能押繪馬を走れ追追鬼來ぬ健氣入鐵持蛇塚面を
 豫認る其里を退ると呼ぶ通能九尺の短鎗押繪や八角の棒をて敷えと找
 め限八真武四物々々と大刀抜殿看と闘戦いも十合に至ら限八も通能も持る
 刃を及落され刺右の肩尖を下高刺れれ勿地糧と落馬しく一重時起り
 ける真武四郎の光景も驚愕怖れて逃すも押繪の透るま八角の棒をて天窓城
 破と撲つ男婦の裏に雷の隊を鬼も異るも真武四郎半身も列衣れて馬を
 平張り浩處時八も後走れおれ通能も聲をてるも其奴も縛らるも
 の時八も起んと春蛭く限八を押し寄せをかりけ怒る程も健宗の後陣の頭
 人杜島番太時其思ひも凶変も驚愕は足れても四五箇の近習も共降
 参降参と喚ぶ敵も近つて來ぬ程も奈我四短平立向も雜兵も皆郷せ敷珠

敷系はゆきありけ。介る程の正忠李彦趙心の魚丸と守護あり成勝と三隊と合し。馬と早めてあはける程の通能の時介生拘隈公を牽せり押繪ハ撲裂る真武四郎の首と合と藤葛の藤と實檢の入れとま世話傳て蛇と殺ま克其首と摧れ。又生て崇まといハ不用意とも押繪の勇悍蛇塚真武四郎と殺捕克其天窓と撲裂。あ冥ふ其美小稱のそ人皆大局入りけ。その他韓錦奈良櫻弟兄の殺捕。牡丹五黒九郎の首級。奈我四郎と短平の相殺もある也刀齋の首の皆合と共実檢の入れが魚丸其功績の孰も勝れと誉まき。就中和田正義の軍功と第一番とま。出波不測の妖婦狂津と只一礫打磔したる修煉の和漢の傳稀ハ彼亡骸の有無や索ねて見まると仰まれ正義則兼りと隊兵と得て腰輿の邊と隈と索果て直に中。狂津の付きし邊より只健宗の首の直故る木像の三四箇碎るあり又狂津女の持る劍の長二尺五寸とありと思ひしと劍のありとる。九寸五分の短刀の其頭は

あり。其鞘は拾毫のそものぬそ共取れ見せまわされ魚丸のゆき藤集ひ諸頭ハ駭然とまらふ者も尚疑ハ鮮さける。開か中小通能ハ正義の向いては和殿も大抵覚あへ下。昨日能與の池邊の賤婦の説と思ふ彼荒社在りとま。黒圖天の木像のぬまりて鐮野の館在り大刀自母子と承りし。又亦樞三郎も押繪と共短刀を列々と見ては。這短刀ハ豫知鐮野の什物也。鐮野前と名づけ。傳來ハ箇様を。如此のゆきまの始ハ已是を知らむ。範的小証られ宛狂の牢殺され。まの短刀の故る。今ハ狂津のま自見と三尺の劍と見えハ亦是狂津の幻術也。其術敗れて登る時短刀ハ彼と離れて怪死で健宗の頭顱と殺落るハ怪死ハ過たれ。ゆきとてゆき返る大刀自夫婦母子の悪報是ハ至て知る死而已とゆき衆皆有理と應て齊一嗟嘆。まのけ。既ハ健宗の首実檢果ハ正忠則魚丸不棄ま。妖怪對治の功ハ獨止義のま。彼仙丹の奇效ハ在り。其仙丹をま。大江峯張の大功ハ正義の

の上小の事。恩賞評議の上異日の御制度。依るに依り莫偶合障。其の儀を異
 國の先蹤。奇事記の事あり。今正可覚。格陽橋。石の偶人。夜化て
 小兒。小戯れ。見え。天朝昔相摸。妖地蔵。亦見。同くと語。然。黒
 闇天の木像。其類。小。速。燔。毒。妖。絶。又。鋪。箭。の。短。刀。既。是
 不吉の物。是。火中。燔。燼。と。烏。有。小。做。免。勿。論。小。也。それ。も。尚。い。ま。鋪。野
 館。小。推。寄。せ。大。刀。自。下。奴。們。を。誅。し。御。本。意。を。遂。げ。と。詞。意。迫。く。促。せ。ら
 魚。丸。趙。心。李。彦。等。一。議。及。び。其。議。小。任。せ。黒。闇。天。の。改。木。像。と。鋪。箭。の。短。刀。正。義。我
 宜。く。奉。り。他。生。拘。見。健。宗。以下。の。首。毎。の。時。八。奈。我。四。所。短。陣。を。奉。り。後。陣。の
 在。る。事。り。と。と。の。隊。二。隊。を。め。如。く。隊。配。を。推。寄。ら。有。斯。程。鋪。野。の
 城。館。天。津。天。若。術。敗。れて。健。宗。横。死。の。事。も。逃。交。り。は。難。兵。の。告。う。小。も。下。と。せ
 知る。大。刀。自。下。留。守。の。頭。人。鬼。薊。苛。三。竹。水。虎。狼。三。有。司。等。不。至。る。も。胸。を。後。ら

怕。惑。ひ。て。落。度。を。受。る。の。事。小。單。大。刀。自。下。從。者。猶。龍。城。と。敵。を。若。の。中。軍。を
 考。へ。と。之。撓。む。あ。ら。る。事。苛。三。虎。狼。二。有。司。等。三。俱。小。諫。誘。め。れ。大。刀。自。下。此。を
 聽。き。怒。罵。る。事。主。僕。忽。地。不。知。る。事。苛。三。虎。狼。二。有。司。等。陽。中。同。意。の。圍
 ち。大。刀。自。下。由。断。さ。せ。透。と。窺。ひ。金。銀。を。擡。擧。ひ。て。逃。げ。示。合。さ。る。程。も。あ。ら。魚
 丸。の。大。軍。數。百。名。推。寄。せ。ま。ら。と。せ。ら。苛。三。虎。狼。二。有。司。等。計。較。違。ひ。て。廿。八。羽。の。事
 遺。り。得。大。刀。自。下。刺。殺。し。寄。隊。小。降。参。ま。し。不。忠。の。及。び。研。ら。け。既。に。義
 兵。の。頭。人。和。田。正。義。韓。錦。樅。二。郎。奈。良。櫻。八。重。作。等。先。鋒。の。軍。兵。三。百。名。と。從
 へ。真。先。小。找。ま。ら。鋪。野。の。館。と。捕。細。て。攻。潰。ん。と。競。ふ。程。小。忽。地。前。門。の。堀。裏
 より。竿。の。頭。小。括。着。る。事。三。四。箇。半。け。近。世。兵。家。の。故。實。也。降。参。の。照。据
 され。正。義。樅。二。郎。等。士。卒。と。禁。め。敢。動。を。後。陣。か。と。告。げ。魚。丸。諸。頭。人
 等。と。共。侶。小。隊。兵。を。率。て。來。身。程。小。逆。徒。の。前。門。を。颯。と。開。け。士。卒。僅。小。二。十。名。左

右三側小籠居て。則寄隊を迎ける。然れども正義權二郎等の偽詭の計あり。と
 思ふをりて八重作等と共侶の士卒と將て找入りて内外隈多く涉獵し伏兵を
 あるところ敵兵多く落亡て目今送留者四五十名過りけり。然程魚丸左
 右の趙心季彦を従へ。正忠成勝通能押給等と共侶の馬を前門小騎入れと女
 關のち登れ。鎭野の有司迎へて航く書院に請待せ。然れが寄隊の軍兵を推續
 せ。欄入りて四下も放言備せざるも。又時公奈我四郎短平生拘見せ牽せ。便書
 院の庭に在り。當下鬼薊苛三竹木虎狼二一箇の書函を携へて有司四五名と共
 侶の檣廊よりより來り。許稟せ。魚丸君上不在と臣等御武徳と怖畏て
 降参す。欲さる單大刀自不の字との。罵り狂多。日され共得首と賜りて實
 檢の備けり。その勸賞の命と饒さる。と喞言が。願ふと有司等々當
 郡の戸帳と金銀米粟と録せ。大冊子と相捧け。共侶の稟せ。臣等大刀自不

害する者あり。されも寸功あらざる。免せ。と思ふ。と第一番の要緊なる。簿
 帳と呈圖仕り。皆免れ。と弱果て陳さる。魚丸は左右を見入り。和田大江
 兩兄意見い。向れて正忠判せ。抑苛三隈八の奸虐多。年來範的の悪を資
 け。不忠の刺を欲せ。範的の不慮の健宗。果されと怨とせ。及て家
 従多。大他を資。其罪既極。然れ。天の冥罰。隈八を陣中。生捕。苛
 三の由。復。留守。在り。悔。せ。既。事。の。急。と。見。て。王。の。養。母。大。刀。自。刺。殺
 多。已。の。首。と。續。き。實。は。鬼。薊。の。虎。畜。る。虎。狼。二。虎。狼。の。恩。と。思。は
 美。を。知。る。五。逆。十。惡。の。罪。人。を。食。ひ。彼。身。を。八。割。し。て。乱。臣。賊。子。を。懲。り。兵。母。其
 奴。等。を。牽。引。し。て。共。に。死。刑。の。形。を。と。烈。し。下。知。小。苛。三。虎。狼。二。駭。馬。怕。れ。逃。ぎ。を
 敬。言。固。の。難。兵。定。鬼。り。曳。搦。下。と。結。扭。が。八。重。作。時。八。檢。使。不。立。て。船。で。隈。八。苛
 三。虎。狼。二。對。面。牽。引。し。て。檢。の。隨。不。引。首。と。實。檢。入。れ。か。健。宗。大。刀。自。の。首

級より其家頭の頭人牡丹五直武四郎黒九郎也乃齋并の寺三隈八虎狼二の直送
 もる皆申明亭ゆ鼻と看らる又黒闇天の本像と鑄造の短刀の正義既に奉りて其燔
 棄て灰も留めざる是より先降参の有司等と庭中牽れ番大近習の寺三虎狼二隈
 公刑戮せらるを見もゆると顔色都て藍の如く只果伏て在りけると李彦と趙心の共
 佛意の魚丸の上正忠成勝の由現幾も克殺を去る和漢仁君の善政を
 正忠成勝の已とる件の有司等と此島番大の各耳を叩再て俱不廢也亦微
 下又生捕の道君等二百餘捕を共進放と捉る況名もる雑兵を皆
 郊外に追退け又大刀自仕る女房の各其親里か下遣し信言亦魚丸の趙心法
 師の返却の靈符を齋と阿魁寺に遣しく用庵和尚の實母周晋比江尼の怨敵
 對治のよと告知らる次の日倉廩と廂をて窮民を賑し士卒小物と賜ふ各差の
 且且異兵糧軍要金戎衣器械を調進する良農巨商を召させ一倍の賞禄

ありて皆十歳と唱けり介後又魚丸の防守李彦と韓錦樅二郎を使とく
 越後身長尾景春の怨敵對治のよと告げ景春其大功の速をも感心あり
 て異日京都將軍の御上て為の恩賞と乞稟まより隨即魚丸と部領の郡司補
 任と本領安堵の御教書と下されけり是より魚丸小名を改め部領郡領武魚と
 稱せらる然れ今春の歡いの口自足のみあり扇谷朝興も先非と悔て和睦し武魚
 と好と結ぶ及びて武魚の舊領より莊園十餘ヶ所と返されりあ甘羅の外なく隣
 郡及信濃に在り昔年武茂滅亡の時逆臣軋射媚て朝興の厚贈りより扇谷
 の所領より其隨返却せられりあ孝感の致所武魚の徴せり富一倍と領
 まれ阿魁寺の坊料と加増し親同胞并菊池武俊夫妻の為追善の佛事
 年毎に間断あらず又能與村の荒社を葺更て且昔歳大刀自不奪承れり辨才天
 の本像を池より撈せせて故の如く是と祭り介後能與院と再興し堂舎落成



三石堂三言卷三

十六

大徳寺

三石堂三言卷三

大徳寺

の時寺にも亦甚く因て其法燈を續せり。然れは和田正忠と家臣とて本子彦超心と
 老黨とを韓錦樞二郎茂洋智小十郎正義兵頭と奈良櫻八重作次世と山田
 頭ととの他見越松時八鶴脛奈我四郎鴨脚短平受所の俸禄少くは知亦郡
 領武魚の純孝を實母周晋比丘尼の爲に閑居の室を造出て老実を女房と女童我
 名後誅在らざる朝夕安否を問はざる。米地隈を治りぬ武魚則李彦の女兒按
 多内室を採り素より孝女を容止る醜くも且其父李彦の孤忠を菊池
 同族の善臣又部領氏の菊池と同姓の好れは正忠若料京一今合番の教を爲り
 這折りて成勝通能媒妁と韓錦の某押繪と和田正義の妻せたり武勇力
 藝一對の夫婦を世に復言はざる所人皆是と羨まじきも正忠の父正忠の素より
 平純樞を欲せし職を辭と妙義を還ると又村日蓮心の衆門人今也は俗務を預るもあ
 るも身の暇を賜て阿難寺に閑居す。武魚一切是を饒る我身尚弱冠なり忠

臣賢者の補佐のむらも今戦國の時小忠を枉て留のひを放つるものゆゑに開が
 中の成勝通能の一時遭際の旅客れども義に依る所已に成勝通能の武運を試し
 ひも功ありしを告別と去らまきげと武魚按る韓錦同胞李彦超心智全別を
 惜と留る程小忠の四年を盡して相改と暮るる天文のころ密下某生重
 説末米之八晴賢の彼夜又人益九郎と翼小忠を乾父吾足齋の宿所小忠
 が貯る金子の由を義女弟を晩稲と極權を欲す其計較廻結を益
 九郎吾足齋の病を負せけるのふしと其門邊を成勝通能の補補を彼身庭
 する乾井の驟れて晩稲の枉死吾足齋の讒悔の條を九郎阿鑊小忠の未
 會の顛末と心も知ら外視を窺ひ潛き松の樹傍に身を棄て逃去る
 程小忠通能不見せられて席鍼の鏡鏡と行半けの御舎を奪く外回小忠下りて
 足信の去るものも素も無類の方人されは遠く立去らる甲夜小忠

路備の影の陰小隠借の裏と菅原と合わつて思ふ今も扇防小赴ふ
 奶の類も五両金中盤纏不足なるもの先づ二浦郎小赴て宿六向かひて
 誘ふ此の盤纏とのせんと猛可計較む奸智の本性其里も路と横をも
 彼印投くもせり畢竟未之公其詰朝宿六を哄訪く後話説甚麼
 をや開く又巻と更めて且下回小解分ると聴ねが。

新局玉石童子訓卷之二十終



綉像畫工

一陽齋豊國



淨書筆畊

谷金川

作者曰本編五七回以下軍陣殺伐の文多き故に綉像本著
 甲申の人物混雜と抄るべ故に軍陣の文を中絶し本編
 の伏誅の如く勸懲を爲し申すべし故に軍陣の文を中絶し
 文を譲り且巻五巻の叙の教諭を増して今二百頁の巻を
 五巻と作者の筆盤纏の巻看官の得用を云戲房の巻と云
 此は板元の書肆文溪堂小伝を教員と云るなり 路備代書

○家傳神女湯ゆめの湯の湯 一包代百銅
 ○精製奇應丸おの湯の湯 一包代五十
 ○熊胆黒丸おの湯の湯 一包代五分
 ○婦人坐の湯おの湯の湯 一包代四分
 制茶本家 四谷隠士 龍澤氏
 弘元飯田町中坂下南側中程 九八氏

新局玉石童子訓第七版

第六十一回より 五巻

推續に 近日用板

代稿作者

澤清右衛門

弘化四年丁未秋月刊彫成

五年戊申春正月吉日發行

大坂書肆

心齋橋筋博労町 河内屋茂兵衛

江戸書肆

大傳馬町貳丁目 丁子屋平兵衛板

五石齋書目

攻文書目

下千重平兵衛文

大政書目

四時盛平兵衛文

正平六年甲申春五日吉日發行

延弘四年丁未秋日既望

外語抄卷

新古今語門

傳風正平書平信榮士效業十二回も

繡像復讐山石見英雄錄

全部 五十冊

南海 玉藻主人 編輯

浪花 一葉斎 歌川芳梅 画

○初編 糸師人作 ○二編 玉藻主人詞著 ○三編 泉陽子詞著 ○第四輯以下作者一家

永録天正の頃筑前名嶋の勇士岩見重太郎橋本李が生さちより武者修好

廿一冊の武功大蛇の害を消き老狸の妖を修り勇威を振ゆ後子天の橋立あり

廣成成洲大川市三人の大敵を斬りて父兄の怨恨を晴し後小室町殿に奉仕して任官

一珍水至水正は後世に傳へるを同じ言はせ奉り豪が良那藩婦岩澤孝女新月本より

繪り黨の五雄と稱する勇士の列傳靈猿思魚の怪談も五輯より八益入佳境新話あり

南久寶寺町心齋橋心入

浪花書肆

伊丹屋善兵衛板

